

令和 5 年 6 月 1 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13906

研究課題名（和文）摂食障害の「ニューロ・バイオロジカル」モデルが医師・患者・家族に与える影響の考察

研究課題名（英文）An investigation into the effect of neurobiological understanding of eating disorders on doctors, people with eating disorders, and their families

研究代表者

山田 理絵（Yamada, Rie）

東京大学・大学院総合文化研究科・特任助教

研究者番号：70837335

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題の成果として次の三点が挙げられる。一点目は学術的な発表である。2021年に博士論文を提出し、2019年と2021年に学会報告を行なった。これらの発表、論文では、本研究課題で行なった摂食障害の歴史的調査、インタビュー調査の分析内容を用いた。二点目に、摂食障害に関する一般公開のシンポジウムを実施したことが挙げられる。具体的には、2022年3月から4月に全4回の企画を実施した。またシリーズ企画とは別途、一般公開の講演会に講師として登壇した。三点目に、今後の摂食障害研究をさらに発展させていくために、受刑者であって摂食障害を持つ方々をどのように捉えられるか刑務所の見学を通じて検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義は、日本における摂食障害に関する専門家の議論、制度、病いの経験などをめぐる歴史的変遷の分析を可能にする広範囲なデータの収集と分析を行なった点である。特に、インタビューでは55名の方に協力していただいた。異なる立場、地域、年代の方々から幅広く摂食障害をめぐる経験や考えを聞き取りを実施した。社会的意義は、学術的な発表だけでなく一般公開の講演会で発表、議論したことである。特に、2022年に実施したシリーズ企画では、摂食障害の経験がありかつ摂食障害に関するさまざまな活動・社会的発信を行なっている方々とコラボレーションして企画・運営を行ったという点で、意義のある企画であった。

研究成果の概要（英文）：There are three research achievements. The first is academic publication. I submitted my doctoral thesis in 2021 and made two conference presentations in 2019 and 2021. In these achievements, I used the historical survey and interview data collected in this research project. Secondly, symposia about eating disorders were organized. I co-organized four conferences in March-April 2022 with people who experienced eating disorders. Also, I presented eating disorders at lectures open to the public. Lastly, after completing this project, I gained new perspectives to develop research on eating disorders further. One of the most critical perspectives is toward prisoners with eating disorders, which has not often been on the agenda of sociological research on eating disorders. I visited four prisons and got some information on the current situation of the prison system and dealing with people with mental health conditions.

研究分野：社会学

キーワード：摂食障害 自助グループ 家族会 生物医療化 医療社会学 身体

## 1. 研究開始当初の背景

「摂食障害」とは、器質的な異常がないにもかかわらず、生命の危機が生じるまで食べることを拒む(拒食症)、ある一定の時間に大量かつ強迫的に食べ続ける(過食症)などの症状を呈する精神疾患である。20世紀後半に欧米を中心として流行が始まり、同時期に日本でも患者数が増加していった。「文化結合症候群(cultural-bound-syndrome)」とも呼ばれた摂食障害は、一般に「サイコ・ソーシャル」な観点、すなわち、発症や流行の原因は、患者の心・患者の家族・患者を取り巻く社会にあるという考え方が支配的であった。

社会学者たちは、この文化依存的な精神疾患について、主に2つの異なる視点から研究を蓄積してきた。一方では「なぜ現代において摂食障害が増加しているのか」という問いが掲げられ、摂食障害増加の社会的メカニズムを読み解こうとする議論が展開された。他方で1990年代からは「摂食障害をめぐる言説は患者にどのような影響を与えているか」に焦点が当てられるようになった。すなわち、摂食障害の心理・社会的な原因を本質主義的な立場から論じる代わりに、それらを相対化し、そうした言説自体が患者に対していかに作用するのかが問われてきた。

このように既存研究では、摂食障害の流行の社会的メカニズムや、サイコ・ソーシャルな説明モデルが患者に与える影響が議論されてきたが、その前提として「摂食障害とは社会・文化依存的に生じる独立した精神疾患である」という考え方が採用されてきた。しかし、摂食障害と「発達障害」との関連が急速に注目されつつある現在においては、新たな枠組みで摂食障害の社会学的研究が行われることが求められていると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究では「摂食障害は、発達障害と同じく先天的な脳や神経の構造的な特徴によって引き起こされている」という考え方を、摂食障害の「ニューロ・バイオロジカル」な説明モデルと呼ぶ。本研究では、この説明モデルが「医師・患者・家族の間でどのように流通してきたか」を検討した上で、実際に患者や家族のアイデンティティ形成や受療行動にいかなる影響を与えているのかという問いを持って研究を開始した。また、研究を進める過程で、摂食障害に関する政策の変遷、摂食障害を捉える理論モデルの生成と受容、病いの経験の時代的变化といった点についても検討を行った。

## 3. 研究の方法

日本における摂食障害の説明モデルがいかに変化してきたかについて、医学論文、闘病記、新聞記事などを対象とした文献調査を行った。また、摂食障害の患者・家族にニューロ・バイオロジカルモデルがどのように受容されているか、また患者・家族の行動にどのような影響を与えているかを明らかにするために、摂食障害の当事者・経験者、そのご家族、自助グループ・家族会、摂食障害臨床に関わる医療者、へのインタビューを実施した。

なお、インタビュー実施前に、東京大学大学院総合文化研究科「ヒトを対象とした実験研究に関する倫理審査委員会」にて調査実施の承認を得た。

#### 4．研究成果

本研究課題の成果として次の三点が挙げられる。一点目は学術的な発表である。具体的には、2021年に東京大学総合文化研究科に博士論文を提出し、2019年と2021年に学会報告を行なった。これらの発表、論文の中では、本研究課題で行なった摂食障害の歴史的調査、インタビュー調査の分析内容を用いて、摂食障害をめぐる政策的な変化、情報環境の変化、摂食障害を捉える医学的モデル（特に「家族モデル」）の形成と受容の歴史的変化の分析を行なった。

二点目に、摂食障害に関する一般公開のシンポジウムを実施したことが挙げられる。具体的には、2022年3月から4月に全4回の企画を実施し、学校生活や仕事、親しい人間関係等のテーマで、経験者の方々や参加者の方々と議論した。またシリーズ企画とは別途、一般公開の講演会に講師として登壇した。

三点目に、本研究課題終了後に、摂食障害研究をさらに発展させていくための、新たな視点を得たことである。具体的には、これまでの摂食障害の社会学的研究の議論の俎上にはあまり上がらなかった、受刑者であって摂食障害を持つ方々に対する視点であり、この点をどのように捉えるかについて刑務所の見学を通じて検討した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 山田理絵
2. 発表標題 摂食障害と情報環境との関係 –インタビュー調査を通じた時代の変化と現在の特徴の検討–
3. 学会等名 第24回日本摂食障害学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Rie YAMADA
2. 発表標題 Anorexia as an Intractable Disease in Japan
3. 学会等名 Society for East Asian Anthropology Regional Conference (SEAA) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

研究者の研究成果等に関する公開ページ <a href="https://www.yamadarie.net/">https://www.yamadarie.net/</a>
---

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------